



棟持柱祖形論

土本俊和（信州大学工学部教授）著

刊行のことば

本書は、棟持柱構造を歴史的な建造物の祖形として位置づけ《棟持柱祖形論》を提示し、現代の研究水準を踏まえ、て幅広く実証的に論じている。

この観点は、戦前から萌芽的に出されていたが、終戦を境にして、その見方は大きく変わった。

《棟持柱祖形論》は日本のみにとどまらず、アジアやヨーロッパでもみられ、ユーラシアに広がる論点である。この論点を今問い直すことは、ユーラシア的な拡がりにて木造建築の原形と伝播と変容を論じる上での土台となる。

本書では、研究史の動向を凝視すると同時に建築遺構を中心としつつ、発掘遺構ならびに文献史料を渉猟した。それによりモノに即した《棟持柱祖形論》を通時的に展開させることを可能とした。

本書は、すぐれた木造建築の文化を持つ日本建築を核としつつ、世界的な視野のなかで、木造建築の原形・伝播・変容を捉えた大著である。

定価 31,500 円（本体 30,000 円＋税）

A4判 上製函入 本文 400 頁 挿図 223 点 ISBN978-4-8055-0630-1 C3052

中央公論美術出版

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱いは

棟持柱構造は歴史的な木造建築の一典型であり、日本建築史を貫く代表的な形である。

この構造は伊勢や仁科神明宮といった神社建築だけでなく、様々な形をなして繰り返し姿を現してきた。本書は棟持柱構造を歴史的な建造物の祖形として位置づけ、建築学に即した理論的アプローチ、建築遺構と文献史料に即した建築史的アプローチ、フィールドに即した民家研究的アプローチにより、海外の木造建築を含む多角的観点と実証的な知見を提供する。

目次

はじめに

序論 棟持柱祖形論の位置

総論

1 民家史研究の総括と展望―棟持柱祖形論に即して

2 棟持柱祖形論の世界史的展望

3 戦前の棟持柱祖形論

4 掘立から礎へ―中世後期から近世にいたる棟持柱構造からの展開―

5 日本民家の架構法

6 棟持柱構造から軸部・小屋組構造への転換過程

7 棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物

8 民家のなかの棟持柱

各論

A 京都

1 京都のマチャにおける軸部と小屋組

2 与次郎組の系譜

―京都のマチャにおける小屋組構成部材の展開―

3 京マチャの原型ならびに形態生成

4 京マチャの原形・変容・伝播

B 信州

1 信州の茅葺き民家にみる棟束の建築的意義

2 赤柴のタキモノ小屋

3 国見の掘立棟持柱

4 棟持柱をもつ諏訪の穴倉

5 タテノボセと土台からみた小規模建造物

6 タテノボセをもつ架構の変容過程

C 甲州

1 笛吹川流域の民家―四建ないしウダツ造に至る掘立棟持柱構造からの展開―

2 ウダツと大黒柱―切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異―

考察

1 ウダツとムナバシラ

2 私は此の柱のことを斯く呼ぶ事にして居る

3 真墨と矩と下げ振り

4 大黒柱の根元のところにすわっていて、くずれた

5 家のなかにいたのに助かった

6 掘立と棟持と丸太

7 基壇と棟持柱

8 ―古典主義建築の系譜と住家構成の発生史的汎性―

9 土台と棟持柱

―中世後期から近世にいたる土台をもつ棟持柱構造の系譜―

8 近世地方マチャにおける吹き抜けと棟持柱構造

9 建物先行型論と棟持柱祖形論

―日本中近世都市の土地と建物―

結論 棟持柱祖形論の外にある事柄

おわりに 棟持柱祖形論の展開

土本俊和 (つちもと としかず)

昭和 61 年 東京大学工学部建築学科卒業
昭和 63 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
平成元年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退
平成元年 株式会社国建建築設計部 首里城復元グループ勤務
平成 3 年 土本建築都市研究室開設
平成 4 年 東京工芸大学工学部助手
平成 5 年 信州大学工学部助手
平成 8 年 信州大学工学部助教授
平成 10 年 英国レスター大学都市史研究センター研究員 (平成 10 年度のみ)
平成 13 年 信州大学工学部教授
平成 17 年 信州大学山岳科学総合研究所兼務教員
平成 21 年 信州大学工学部建築学科学科長

主要著書

『復元日本大観 6 民家と町並み』 世界文化社・1989 年 共著
『図集 日本都市史』 東京大学出版会・1993 年 共著
『中近世都市形態史論』 中央公論美術出版・2003 年 単著
『飯山小菅の地域文化』 しなのき書房・2005 年 共著
『平安京の住まい』 京都大学学術出版会・2007 年 共著

